

大学を核とした「(仮称)キャンパス特区」 による若者を引き付ける都市づくり

DG PROJECT

青木 宏幸¹・益田 由利¹・上農 淑子²・小野 朝美¹
村上 慎哉³・麻生 貴裕⁴

¹熊本大学 施設管理ユニット

²熊本大学 施設企画ユニット

³熊本大学 図書ユニット

⁴熊本大学 建築学科

熊本県、熊本市では九州新幹線鹿児島ルートの開通、政令指定都市への移行、また海外戦略の一環として本学も含め中国への海外拠点事務所設置など大きな転換期を向かえている。一方、都市間競争の激化、高齢化と年少人口の減少など社会的課題に直面し、若者の県外流出が懸念されている。

ナンバースクールの1つである旧制第五高等学校が設立された熊本は有名な偉人を輩出した。これらの歴史を背景に、熊本は「学都」と呼ばれるにふさわしい時代があり、現在でも大学の集積度が高く、熊本市内では学生数が多い。しかしながら、学生が総体として熊本のまちの中で何かの役割を發揮するなど、積極的に存在感を示すことはあまりない。若者を引き付ける魅力ある都市づくりを目指すために「学生間のつながりを強化する」という目標を立て、県内でも大学の集中度の高い熊本大学周辺の地域をモデルケースとしてハードとソフト両面の具体的提案を示し検証した。

1. 提言が解決を目指す社会の問題や課題とその背景

(1) 現状の取り組み

現在、熊本県、市では2011年3月に九州新幹線鹿児島ルートが開通し、翌年4月1日には、政令指定都市に移行予定など大きな転換期を向かえている。これを契機に熊本城をはじめとした歴史遺産や清らかな地下水・豊かな緑などの自然環境を観光資源として都市のブランド化（わくわく都市くまもと）を推進している。

しかし、この新幹線開通によって、観光客の増加など多くのメリットがもたらされる反面、他の都市との競争が激化していくことも予想され、楽観視はできない。

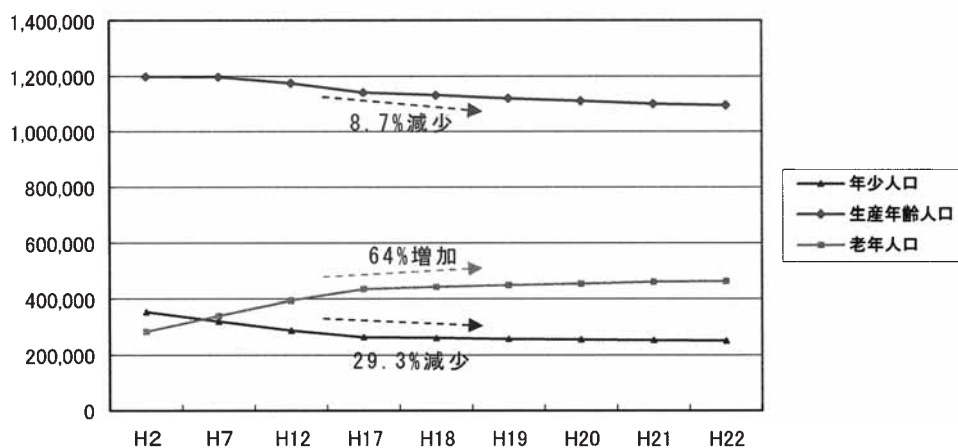
現在熊本大学、熊本県、熊本市の三者で「くまもと都市戦略会議」を発足させ、コンベンション都市づくり・学生のまちづくり・熊本駅から中心市街地に向けた賑わいの創出をテーマに三者協働で取り組んでいる。学生のまちづくりへの参加など大学と地域の交流は近年活発であると言えるが、実のところ学生相互のつながりについては話題が少ない。

(2) 県内人口の減少、高齢化（若者の流出）

熊本県の人口は、平成12年1,859,344人、平成17年1,842,233人、平成22年1,817,410人と平成12年以降は年々減少を続け平成17年から5年間で24,823人減少している。そのうち、65歳以上の老年人口をみると平成12年396,020人（県の総人口に対する割合21.3%）、平成17

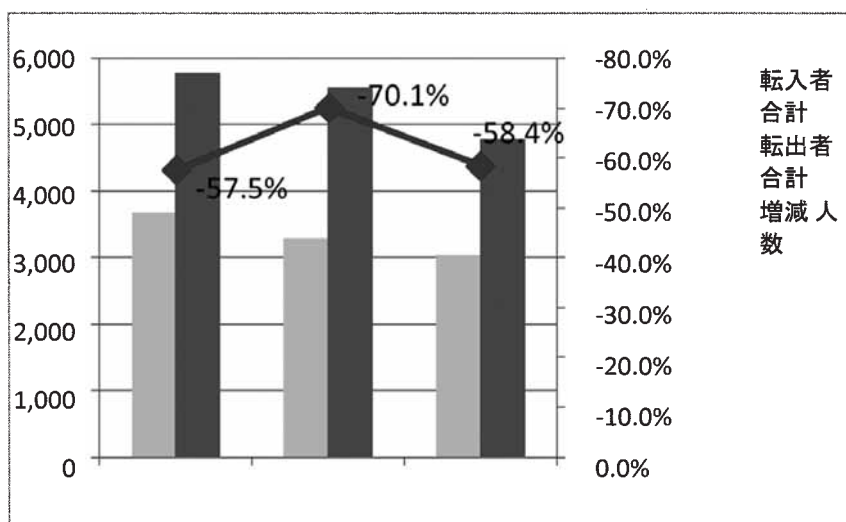
年437,244人（23.7%）、平成22年465,743人（25.7%）と増加しているのに対し、15歳未満の年少人口は平成12年288,654人（15.5%）、平成17年264,013人（14.3%）、平成22年251,350人（13.9%）と減少し、県内の高齢化は急速に進行している。

また県内人口の減少が進んでいる中で年齢3区分の内、年少人口は20年間で10万人減少しており年少人口の減少が顕著となっている。（図－1）



図－1 熊本県の年齢3区分別人口の推移
 (熊本県ホームページ資料(熊本県推計人口調査)により作成)

また、15～19歳の人口移動の増減人数は、平成20年2,102人、平成21年2,292人、平成22年1,763人と転出超過が他の年齢と比べて最大であり、そのことは県内の大学進学想定年齢の人口が今後減少していく傾向を示している。（図－2）



図－2 熊本県の年齢15～19歳社会動態
 (熊本県ホームページ資料(熊本県推計人口調査)により作成)

(3) 「学都」の魅力の消滅（都市の魅力度が低い）

我が国では旧制高等中学校は5校、その後旧制高等学校と改正され8校が創設された。これらはナンバーズクールと呼ばれ、熊本には、東京、東北、京都、金沢に次ぐ旧制第五高等中学校が創設され、現在の熊本大学の前身として、夏目漱石、小泉八雲をはじめとす

る教師が配属され、寺田寅彦、池田勇人、木下順二など物理学者、政治家など輩出し、学都と呼ばれるにふさわしい時代があった。

熊本は大学の集積度が高く、特に熊本市内では人口一人当たりの学生数は全国政令都市中7番目であり、学生が多いことも大きな特徴となっている。しかしながら、「学都」を彷彿とさせるように、学生が総体として熊本のまちの中で何かの役割を發揮するなどの存在感を示すことは少なく、「学都」の魅力が半減してしまったとも言える。

(4) 若者コミュニティの脆弱化（横のつながりが弱い）

学生のまちづくりは熊本大学、県、市の三者による「くまもと都市戦略会議」の取り組みテーマの一つとして掲げられている。また、県内の14大学による高等教育コンソーシアム熊本では学生たちの活動が非常に活発に展開されており、学生のまちづくりへの参加など大学と地域の交流は近年ますます活発になっていると言える。しかしながら、コンソーシアムの活動やまちづくりに参加する学生は一部に限られており広がっていかない傾向が見受けられる。これは学生相互のつながりが希薄であり、若者コミュニティの脆弱化が原因となっていることが考えられる。

2. 提言の目的

熊本県内には高等教育機関が14校在り、合計3万人の学生が学び暮らしている。しかし一般には学生や若者の存在の重要性については認識が薄いと言える。例えば、県内で学生が生活を送ることの経済波及効果は年間300億円（100万円／人）と推計される。また、県内の15～22歳代の若年人口が減少していく中で担保された定住人口と捉えると若者を引きつける都市づくりが必要と考える。若者を引きつける都市づくりをさらに推進することができれば、さらなる経済効果も期待できる。

このように学生が熊本というまちをベースに、誇りと存在感を示しながら、生き生きと学び暮らし、憧れの感じられる、若者を引きつける魅力ある都市づくりを目指すべきであると考えられる。

今回は、熊本大学を含めた4大学が近接するエリアをキャンパス特区と位置づけ、その周辺地域に学生の、学生による、学生のためのにぎわいの場を仕掛けることで学生間のつながりを生みだし、さらにはそれをモデルに県内の大学を有機的につなげていく都市づくりを提案するものである。

3. 提言内容

(1) 現状把握

熊本大学を中心とした半径1kmの範囲には熊本大学を含め4つの大学があり、九州の他の都市にない特徴を持っている。九州ルーテル学院大学と熊本大学北キャンパスを合わせた地区と熊本大学南キャンパスの間を県道337号線が走り、その北には立田山自然公園が近接している。熊本大学南キャンパスに沿って白川が流れ、その白川には子飼橋・竜神橋が架かり、産業道路を挟んで熊本学園大学が立地している。東海大学熊本キャンパスはJR豊肥本線と熊本東バイパス57号線に挟まれたエリアに立地している。

若者を引き付ける魅力ある都市づくりを目指して「学生間のつながりを強化する」とい

う目標に向けて、物理的なアクセス、つまり道が繋がっているかどうかという観点からこの熊本大学周辺の地域を検証してみると、4大学の相互のアクセスは良いとは言えず、立地が障壁となっていることが明らかになった。

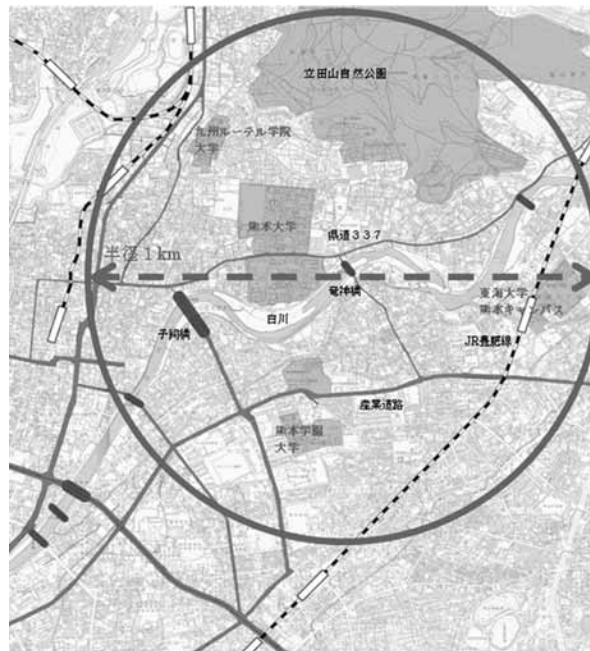


図-3 キャンパス特区モデル地区

4. 具体的提言内容

各大学の学生を結びつけるために、ハード面の仕掛けの採用とソフト面の取り組みの拡充を提言する。

(1) 公用地の整備～ハード面の仕掛け「クロスロード」～

つながれた各大学間を行き交う手段は直線距離にして1 km程度であるので自転車又は、徒歩が考えられる。近年、自転車による事故が社会的な問題となっているが、熊本市内アーケード街でも若者の自転車マナーの悪さが指摘を受けている。熊本大学周辺でも歩道が狭いこともあり、事故が多い。若者の自転車マナーの改善が求められると共に、高齢者を中心とした歩行弱者が安心安全に歩くことができ、自転車も快適に通行できる道路の整備は必須であると言える。具体的には既存道路の拡幅や新たな付け替えも含み、各大学とその周辺をつなぐ歩行者と自転車専用の道路の整備である。さらに、熊本の持つ資源を最大限に活かし緑・水辺・文化を目線を感じながら人が行き交う、出会いのあるクロスロードの実現を提案したい。クロスロードとは河川沿いの道と文化をつなぐ道の総称である。クロスロードの各所にあるポケットパークが休憩所となり、にぎわいをつくる。

a) 緑で大学をつなぐ

大学間に点在する公園や未整備の公用地をポケットパークとして整備し、にぎわいの場をつくる。道路沿いのちょっとしたふくらみでにぎわいが生まれるように人が話せるスペースを備える。

b) 水辺で大学をつなぐ

白川は身近に水と緑が親しめる貴重な空間であるが、大学間をつなぐという観点から言えば、地理的に相反している。「白川の水辺空間計画」(平成18年8月 国土交通省 熊本河川国道事務所)での基本方針である河川沿いの歩行者道または自転車道のネットワーク整備とリンクし、展開をより具体化させることでにぎわいの場とすることができる。既存計画と連続性を図りつつ、既存橋の改築、水辺公園の整備を行うことで特に熊本大学南キャンパスと熊本学園大学キャンパスをより近くすることができる。

c) 文化で大学をつなぐ

熊本大学や周辺に点在する文化的建造物は、教育資源、市民遺産、観光資源として非常に重要である。しかし、アクセスの悪さから観光との関連性が弱く、活かしきれていないとは言えない。北は登録有形文化財のリデル・ライト両女史記念館から九州ルーテル学院大学にある登録有形文化財の高等学校本館、熊本大学にある有形文化財の五高記念館、化学実験場、赤門、機械実験工場、登録有形文化財の熊本大学本部、南部には有形文化財の徳富旧邸、熊本学園大学にある登録有形文化財の産業資料館、九州学院にある登録有形文化財の講堂兼礼拝堂まで大学キャンパス内の文化的建造物を取り込んで専用道路でつなぐ。また大学とこれらの文化的建造物及び周辺のスポットを案内板で紹介する。専用通路は電鉄北熊本駅から豊肥本線水前寺駅まで延ばすことで観光客も足を運びやすくなる。周辺の文化的財建造物とキャンパス内を散策するルート(Historic Zone)を整備することにより学生と住民及び観光客とのにぎわいを創出できる。

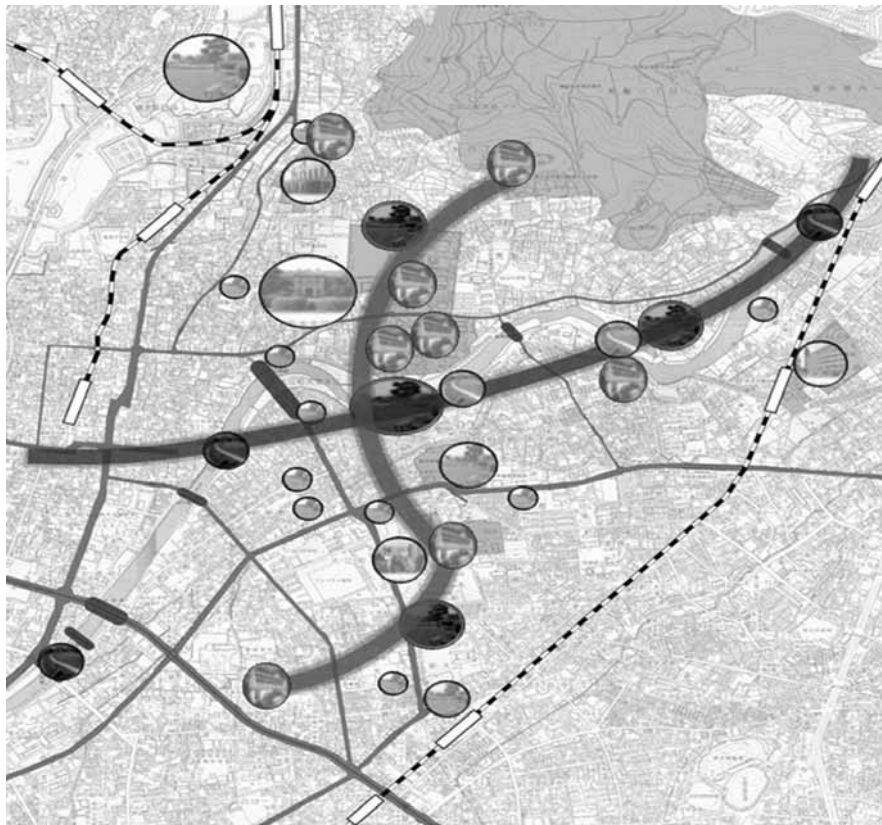


図-4 クロスロードのイメージ



写真－1 大学をつなぐ緑（ポケットパーク）、水辺のイメージ



写真－2 観光客が訪れたい文化的建造物

(2) クロスロードと電チャリシステム

主要なポケットパークには自転車の駅を設け、太陽光エネルギーを利用したナビゲーション付きの電動アシスト自転車の貸し出しを行う。各駅ではバッテリーの交換ができる。利用者を登録し、ICカードによって管理をすることで放置自転車対策を行う。「第2次熊本市自転車利用環境整備基本計画（案）」（平成23年 熊本市）の観光型レンタサイクルの取り組みと協働することで展開をより具体化させることが可能である。



写真－3 つなぐための電チャリシステムや自転車道イメージ

(3) ハード面の仕掛けについての具体的方策

a) 整備方針

ハード面の仕掛けの整備にあたっては、以下の基本的な考え方に基づき、安全で快適な環境づくりと、利用しやすさに配慮した設計とする。

①景観（緑地、照明、セキュリティー）

- ・自主管理しやすい樹種、木陰をつくる緑化
- ・照明による安心安全で死角をつくらない空間づくり

②ユニバーサルデザイン（バリアフリー、サイン）

- ・誰もが歩きやすく、自転車も走りやすい段差のないみちづくり
- ・人にやさしくデザイン性あるサイン、ベンチなどのストリートファニチャー

③環境配慮（太陽光エネルギー）

- ・近隣大学までの行き来に便利な電チャリシステム

- ・太陽光エネルギー利用のバッテリーシステム・照明・誘導光の導入
- ④通信（衛星ナビゲーション、ツイッター）
- ・携帯端末を活用したコンテンツ配信と誘導システム
- ・大学サテライトを活用した情報発信システム
- ・フリーマーケットによる情報交換の場づくり

b) クロスポイントの整備案

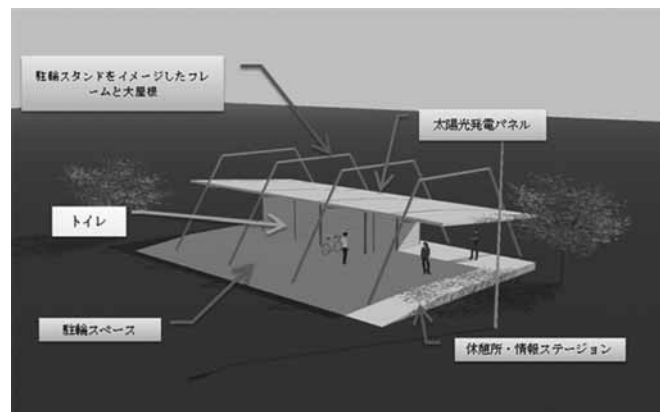
特に熊本大学と熊本学園大学は、直線距離にすると近いにもかかわらず、迂回しないと互いにアクセスできない。

この直線距離を結んだ白川河川敷を学生や地域住民など多くの人が交流するクロスポイントとする。クロスポイントとなる白川河川敷は景観の良い空間であり交流の舞台として最適である。子飼橋と竜神橋の間に人と自転車専用の橋、交流のための広場、イベントが可能な芝生、そして、長時間の滞在を考慮したトイレ付きの駐輪場、屋根面に設置された太陽光パネルによる電動アシスト自転車充電システムの配備を提案する。

休憩所や情報ステーションなども併設し、交流を促す情報発信などの機能を付加することで多くの学生のつながりや交流をさらに促すことができる。



図一 5 白川の河川敷（クロスポイント）の整備計画



図一 6 電チャリシステム機能のポケットパーク

(4) ソフト面の取り組みの拡充についての具体的な方策

ハード面の仕掛けの整備を進めると同時にソフト面の取り組みの拡充も重要である。以下のような具体的な方策を提案したい。

a) 大学間の交流で学生をつなげる

①オープンキャンパスで学生をつなげる

既に行っているオープンキャンパスや大学祭を、熊本の良さ、キャンパス特区エリアの住みやすさも知ってもらう機会としたり、前述のクロスロードやポケットパークを積極的にアピールすることでさらにキャンパス特区の認知度を高めることができる。また、これらの取り組みの結果としてこれまで以上に、学生と学生がつながり活気ある交流が生まれ、それが市民の目にもふれる機会となる。

②サークルで学生をつなげる

学生を取り巻く環境を自らよりよくしたいという有志で「キャンパス特区」を考えるサークルを創設し、創出されたアイデアをくまもと都市戦略会議などに働きかけるなどして実現に向けて動くことができる体制をつくる。

一方で、オープンキャンパスや大学祭の全大学情報イベントカレンダーを作成し、それらをつなぐイベントも計画・実施する。

③情報交換で学生をつなげる

上述のソフト面の取組みを推進する中で、情報交換しやすい環境が整い、様々な大学関連の情報を収集することが可能になる。それらの情報は中心市街地に設置された各大学のサテライトで常に掲示されるように働きかけることで学生の活気をキャンパス特区住民以外の市民や県民に知らせることができる。

b) 住民との交流

①みず灯りで学生と住民をつなげる

熊本では、「みずあかり」「水打ち」などが熊本城周辺及び中心商業地で行われており、恒例のイベントとして定着している。それらのイベントを、白川の河川敷整備を機に中心市街地から白川で大学方面へつなぐ取組みへ展開することで、学生と住民がつながり、交流する姿が見えることとなる。

②ポケットパークで学生と住民をつなげる

熊本大学のまちなか工房をはじめとする大学のサテライトでは、研究発表やまちの方と一緒に社会的課題に取り組む場となっており、キャンパスの枠を越えた活動として期待が高まっている。そこで、学生を中心としたより垣根を低くした、情報「市」としての性格を持つ学生フリーマーケットをポケットパークで実施することで、学生と住民によるにぎわいが創出される。

c) 留学生の参加

留学生は自らの専門領域の研究以外でも外国語その他の能力を活かして活躍することが期待されている。留学生たちが活躍できる機会が増えれば、熊本に滞在中の生活の充実にもつながる。たとえば、文化資源をつなぐみちづくりのなかで、留学生が出身国からの観光客を案内するようなことも可能であり、海外に向けた熊本の素晴らしさの発信の一助となる。

5. 考察

(1) 期待される効果

上記の提案を実現することで期待される効果として、以下のことが考えられる。

まず、学生のコミュニティが充実し、熊本における学生の存在感をより強く示し、若者のもつ力の顕在化につながるであろう。学生が集まりにぎわいが生まれ、また学生が集まる。まさに熊本の「学都」の魅力を確認することになる。

次に、学生主体での環境づくりの推進を可能にする。工学系の学生にとっては、自らの提案を具現化できる機会、また社会科学系の学生にとってはコミュニティの直面する課題のケーススタディ、語学を学ぶ学生にとっては海外からの観光客へのネイティブな対応など、様々な関心をもつ学生に対して社会参加の機会を提供することができる。

(2) 限界や乗り越えるべき課題とその対処方法

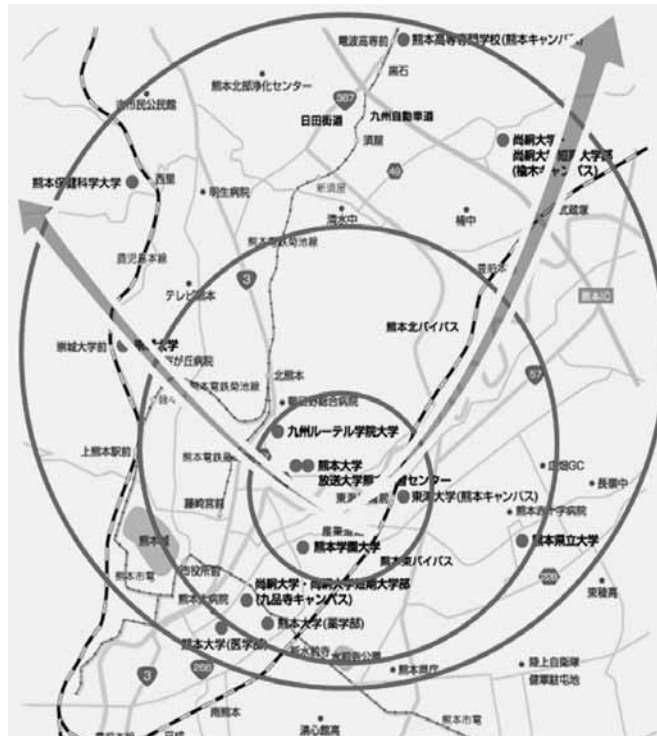
提案内容のハード面の仕掛けについては、ポケットパーク、河川敷整備、竜神橋をはじめとする橋の整備、道路整備などの公共事業であり、現段階での実現可能性は低い。しかし既存の公園の利用や現在進行中の都市計画とも整合性があり、関連性の高い提案であり、行政との協働で実現可能性が皆無なわけではない。

公用地の整備（ハード面の仕掛け）については、熊本の大学にとってどれだけ有用な取り組みとなるかがその判断基準となる。したがって、整備されたハード面の仕掛けを基盤としたソフト面の取り組みの拡充がどれだけの交流を生み出し、学生の学びと生活の充実度を高めるものであるかが重要である。そのためには、学生自身が自らの置かれた環境をよりよくしたいと願い、そしてその仲間づくりができるか、また、より多くの大学と手を結ぶことができるかがカギとなる。昨今の学生には大学での余裕のないカリキュラムや生活のためのアルバイト等で忙殺され余裕がなく、社会とつながりをもってリーダーシップを発揮する者も少ないことが指摘されている。しかしながら、実は私たちが思っている以上に多くの学生が社会貢献活動に参加していたり、機会があれば参加したいと思っているとの報告もされている。そのような学生を掘り起こして取り組みの主体を担っていく動機付けをする体制整備も必要であろう。

6. まとめ

今回の提案は、半径1キロ内の4大学が集中する地区をモデルにポケットパークの整備による道づくりや、水辺の道づくりなどのハード面の仕掛けとそれらを活用したソフト面の取り組みによって、若者を引きつける都市づくりの方策を目指した。

将来的には、この4大学以外の他大学への展開を拡大し、有機的につなげていくことで、大学間、学生間のつながりがより豊かなものとなり、学都の復活に結び付くものとする。



図一七 キャンパス特区の広がりイメージ
(高等教育コンソーシアム熊本/高等教育機関マップにより作成)

謝辞：本提言策定にあたり、熊本大学大学院自然科学研究科教授伊藤重剛先生からは多くのご指導をいただきました。又、熊本大学運営基盤管理部施設担当田代文彦部長からは資料を提供して戴くと共にご助言をいただきました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 1) 熊本県ホームページ「<http://www.pref.kumamoto.jp/>」
- 2) 熊本市ホームページ「<http://www.city.kumamoto.kumamoto.jp/>」
- 3) 国立大学法人熊本大学ホームページ「<http://www.kumamoto-u.ac.jp/>」
- 4) 高等教育コンソーシアム熊本 平成22年度 事業報告書
- 5) 上野真也・河村洋子・吉田国光：大学生の社会貢献活動、価値観、ライフスタイル調査、高等教育コンソーシアム熊本、2010。

CITY PLANNING WHICH ATTRACTS THE YOUNG MAN BY
"THE SPECIAL CAMPUS (tentative name) AREA"
WHICH USED THE UNIVERSITY AS THE CORE

Hiroyuki AOKI, Yuri MASUDA, Yoshiko UENO
Asami ONO, Sinya MURAKAMI and Takahiro ASO

Today, Kumamoto is facing a major turning point. In March 2011, Kyushu Shinkansen opened from Kagoshima to Kumamoto, which completed the whole line. Further, the City of Kumaoto will shift to a government-decreed city. The city has established offices mainly in asian countries, aiming at the globalization. However, the competition among cities in Kyushu is pointed out. Also, the aging society with fewer children is challenging for Kumamoto as well as other places across Japan. Kumamoto University is one of the historic universities across the country, and many well-known individuals were graduates from or teachers of the university especially in Meiji era. Kumaoto used to be called "Gaku-to" (meaning academic city) with the vivid images of many students. But now, students tend not to be connected each other and not to appear in those activities for the city development. The potential of students seems to be latescent.

We proposed several concrete ideas to make Kumamoto "exciting for young people," focusing on the area which is university-densed around Kumamoto University.